

中学校国語教科書における図書館教材：1951（昭和26）年改訂『中学校・高等学校学習指導要領国語科（試案）』と対応する教科書の場合

菅 修一

I. はじめに

図書館利用については、現在、大学では情報リテラシー教育が盛んに行われている。小学校・中学校では「調べ学習」が行われるようになり、調べることに意図して取り上げられることも多い。もっとも、児童・生徒の図書館利用は、図書館利用教育を受けることもなく図書館に出向き、戸惑い試行錯誤しながら図書館利用に慣れていく場合も多い。筆者も小学校の頃、学校教育の中で教師から図書館利用について詳細な説明を受けたことはなく、地元の公民館に図書室があることを偶然知り、貸出利用を繰り返しながら、図書館利用に慣れていった。

本稿では、図書館利用について国語教科書はどのように扱っていたのか、どのような教材があったのかについて、その端緒を報告する。戦前の国定小学国語教科書『小学国語読本 尋常科用 巻九』（1937（昭和12）年）に「第十七 図書館」と題する教材が存在することは既に知っていた。また、その後の国語教科書の図書館教材については福永による研究¹⁾があるが各教材について詳細に知ることはできない。平井による研究²⁾は「調べ学習」に関わって各教科に渡る教科書を検討しているが1989（平成元）年学習指導要領以降の教科書を対象にしていた。筆者は戦後検定教科書のうち、国語科における図書館教材を調査することにした。今回は、1951（昭和26）年改訂『中学校・高等学校学習指導要領国語科（試案）』が現在の学習指導要領に比べ、詳細で細部にわたって分析され、図書館も多く取り上げられていたので、この学習指導要領に対応するいくつかの「国語科」教科書から図書館教材を紹介することにした。

Ⅱ. 1951（昭和26）年改訂『中学校・高等学校学習指導要領国語科（試案）』における図書館

この学習指導要領は1951年10月に文部省告示ではなく（試案）として刊行されている。本書の中には、「教科書の課程も、本書に基づいていなければならない。」(p.2)と記述されている。（試案）とはいえ、当時の各社の教科書は、この学習指導要領に基づいて編集されている。

では、図書館をキーワードに、この学習指導要領の中学校の箇所を見ていく。

まず、「第一章 国語科の目標」の「四 中学校・高等学校の国語学習指導の目標は何か」(pp.16-17)の箇所で、中学校の国語学習指導の目標が23項目掲げられている。図書館に関しては「15 目録や索引の使い方がわかり、図書館を利用することができる。」が掲げられている。

「第二章 中学校の国語科の計画」では、国語能力には「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つの側面があるのだが、「読む」ことに関し、指導計画を立てるために、中学校生徒の読むことの実態を捉える調査が必要としているが、生徒の図書館利用の程度を調べ、図書館における態度を観察することが、通常行われる調査であると、例示されている (pp.48-49)。

「読む」ことに関しての各学年の目標として、第一学年では「学級文庫などで喜んで読書するような習慣をつける。」(p.52)という目標を掲げている。第二学年では「図書館などで良書を選択して読む。」(p.53)という目標を掲げている。第三学年では「図書館などでの読書や書物選択の態度・習慣を身につける。」(p.54)という目標を掲げている。生徒にとって最も身近な場所である学級に多くの本を揃えた文庫を設置し、多様な書物に触れる端緒を設け、さらに図書館で良書を選ぶ選択する力を身につけさせ、最後に、図書館利用と読書しかも書物を選択する力を習慣として身につけさせようとしている。この学習指導要領が出された1951年当時、「卒業後ただちに実社会に参加する」生徒が大半であった (p.20)。図書館を利用して適切な書物を選ぶ力を身につけさせることは大切な、社会人になっていく中学生に必須の事項として考えられていた。

「読む」ことに関しての指導上の注意点として、第二学年において、「図書館利

用については正しい習慣をつけておかなければならない。」(p.57)としている点は、先述の目標事項と対応する。図書館をとにもかくにも利用する、ということではなく、正しい利用法についても身につけさせようとしていた。

生徒個人個人に着目し、「図書館を充実して、個人差に応じる資料を多く準備すること。」(p.58)を注意点としている。図書館資料を選択する際に生徒の個人差に応じた心掛けをもつことを指摘している。

注意点については、読書衛生、読書環境にも随分重きを置き、「図書館だけでなく、教室の机の位置や採光に注意すること。」(p.59)を掲げている。読書に伴って、近視など眼の健康を害することがないようにする配慮の視点である。

「学校図書館の運営に参加させるほか、公共図書館や、小学校・高等学校の図書の交換利用をも試みるとよい。」(p.59)との指摘を行っている。学校図書館は生徒が、利用者としてだけではなく、主体的な運営者として関与する場所であると位置づけていること、他の図書館との交換利用とは相互貸借の発想の展開である。主体的で他館種の図書館も踏まえた発想は生徒に図書館を見る目を広くするものだと考える。

「五 中学校生徒の主要な言語経験の一覧表」には、36の項目が掲げられているが、この箇所にも「24 図書館を利用する」(p.73)、という項目がある。当時の中学校国語科において、図書館が大きな柱であったことは、この箇所からも分かる。

「第三章 中学校の国語科の単元の例」の「二 各学年の単元の選び方および展開のしかたへの注意」には、単元として考えられる事項が学年ごとに挙げられている。この箇所では、第一学年に「図書館の利用のしかた」(p.101)が掲げられている。図書館利用が中学校国語科の大きな柱としていることが、この箇所でも分かる。以下で紹介するように各社の教科書で第一学年用に図書館教材が多いが、この箇所と対応していることが推測される。

Ⅲ. 図書館教材の具体例

- (1) 「六 本に親しむ」；収録教科書：東京書籍『改訂 新しい国語 中学一年上』
(柳田国男編；1953年刊；教科書番号791；使用年度1953～1961)

本単元冒頭 (p.120) で、「どんな書物をどのように読んでいけばよいか」と「図書館の果たすやくわりを正しく理解し、その設備を十分に活用したい」が本教材の目的・課題である旨述べ、教材本文に進んでいる。

教材本文の構成は次の通りである。

- 一 本の読み方 清水幾太郎 (pp.120-125)
- 二 学校図書館 (pp.126-135)
- 三 図書館の話 中井正一 (pp.136-145)

「一 本の読み方」は他社（三省堂出版；後述（4））の教科書にも掲載されている。初出は「少年少女」（中央公論社）昭和26年1月号。

良い本であれ悪い本であれ、おもしろそうな本を沢山読み、読み終わった時点で読み終わった本のおもしろかった点よかった点を考えノートに書きとめることを勧めている。この作業により良い本と悪い本を区分できる、という。ほんとうに良い本は「心の深いところにさわるような書物」である、と述べている。後述2.の「(四) 読書の態度」の本の選び方に比べ、悪い本も含めておもしろそうな本を沢山読むよう勧めている点は過激な表現になっているが、興味深い記述である。

「二 学校図書館」は、学級担任の先生、図書係の先生、生徒による会話形式教材である。取り上げられている事項は、図書館や本について図書係の先生に遠慮なく相談可能なこと、開架書架、本を取りあつかう際のマナー（本を乱暴に取り扱わないこと、図書館内は静粛にすること）、読書衛生（指をなめてページをめくらないこと、姿勢を正して読むこと、暗いところで読まないこと）、本の背ラベル（筆者注：請求記号ラベル）、分類、カード目録の検索法、貸出、リクエストである。

「三 図書館の話」は中井正一が執筆している。最初に粘土板やパピルスからはじまる記録メディアの歴史を概観している。次に手書きから木版、活字印

刷への転換を記している。書物を集めて多くの人に読ませるようにしたのが図書館、と図書館を定義している。その後、図書館の保存ための工夫・大切さ、資料のマイクロ化、図書館のカード目録（特に件名目録について多く言及）について、説明している。

(2) 「六 読書」；収録教科書：光村図書『中等新国語（言語）一』（垣内松三著；1954年刊；教科書番号7-733；使用年度：1955～1958）

教材本文の構成は次の通りである。

- (一) 余暇を利用して読書しよう (pp.82-84)
- (二) 伝記の選び方と読み方 (pp.84-90)
- (三) 図書館 (pp.90-100)
- (四) 読書の態度 (pp.100-104)

「(一) 余暇を利用して読書しよう」では、教科書の勉強以外にほかの本に親しめるように時間を能率的に使い余暇を生み出し、それを利用して読書しよう、と問題提起ではじまっている。また、帰宅時に歩きながら本を読む登場人物に彼の父親が危険だと注意する場面を入れている。歩きながらの読書は、危なく、集中して読むことは難しい、との注意喚起である。一週間期限で友人から借用した本という設定で、1日あたりの読むべき頁数、そのための読む速さを計ることも課題にしている。本を読む速さに関する話題である。

「(二) 伝記の選び方と読み方」では、伝記を読んでの感想を述べ合う中学生たちの会話を掲載し、その後に伝記の種類を列記している。この伝記の種類を受けて、伝記を読む際の選択の仕方を中学生が議論している。

「(三) 図書館」では、よし子という中学生が図書館に関する本を読んでノートを作ってみた、という設定で図書館に関して解説している。取り上げられた事項は、「司書」、「目録カード」、「書名目録・著者名目録」、「件名目録」、「本を借り出す」、「図書館の蔵書」、「本の分類法」、「蔵書の整理」、の8項目である。

その中で目録や分類に関する事項は、中学生が、この二つを使いこなせるよ

うに詳細な説明となっている。「目録カード」では、その意義を示した上で目録カードの実際例を図版に示しながら（図版では、書名が『山からきたうさぎ』、著者名が「木下和子」と記されている）目録カードの読み方を紹介している。特に請求記号の読み方を詳細に説明している。書架上で該当図書に辿り着くために請求記号を読みこなす必要があるので詳しい説明がなされている。

「書名目録・著者名目録」では「目録カード」の箇所の図版に拠りながらカード目録形態の書名目録や著者名目録を、どのように探していけばよいかを説明されている。

「本の分類法」では、「日本十進分類法」を解説している。大きく「十の部類」に分かれるとして、それぞれの主題を表にして明示している。その後、「十の部類」が類、綱、目と細分化していくこと、616と911について、それぞれが、どの類、綱、目に対応しているのか、説明している。加えて付与された分類により、どのように書架上に排列されているのかを説明している。

なお、末尾には「自分でまとめてみよう」と題して、知識を確認・復習するために14の問題が記されている。その中には、目録や分類を使いこなすための問題もあるが、「(7) 図書館の本は、なぜ分類するのか。」や「(8) 自分かってに分類するのと、決まったやり方で分類するのと、どちらがよいか。」など、分類することの根底にある意義を問うものがあった。

「(四) 読書の態度」の初出は毎日新聞社編『本と本のやくめ』である。これも他社（愛育社；後述（5））でも登場する。本教材では、よい本の選び方を検討している。昔からよい本として今も尊ばれている本、先生や父兄の方に教えていただきよい本を選ぶこと、を提案している。くり返して読むたびに新しい喜びと感激とを見いだす本が、よい本だと思う、と述べている。

末尾に、読書表や読書ノートの作成を提案している。図書館の本の場合には、「図書館番号」を記しておくことを勧めている。次に同じ本を読みたい時、さがす手間を省けるからだという。

(3) 「七 読書の方法と技術」；収録教科書：光村図書『中等新国語（言語）二』

(垣内松三著；1954年刊；教科書番号8-829；使用年度：1955～1959)

次の三つにより構成されている。

- (一) 書物の選び方 (pp.108-112)
- (二) 読書の方法と技術 (pp.112-115)
- (三) 読書の衛生 (pp.115-117)

「(一) 書物の選び方」では図書館で自分にあった本を探す際のポイントを語っている。

まず、中学生が学芸会で行う劇脚本を探すために図書館を利用したケースを紹介している。沢山ある脚本から自分にあったものを探す場合、学校劇の脚本や青少年向きの脚本を探すこと、図書館の係の人に相談すること、事前に先生や演劇クラブの人たちにきいて見当をつけてから図書館に行くことを提案している。

もう一つ、社会科で『こめ』のことを調べるケースを例にとり、調べるために本を読む際の留意点を示している。事前に学校図書館で児童百科事典や社会科辞典を調べて、どのような本を利用したらいいか、見当をつけておくこと、自分の力に合った本を選ぶこと、必要な情報が書かれているところだけを念をいれて読むこと、等を説いている。

「(二) 読書の方法と技術」では、精読、多読、研究的な読み方、普通の読み方、拾い読み、それぞれについて説明している。加えて、読みに上達するために必要な読書の技術を紹介している。「1 注意を集中すること。」「2 中心思想をつかむこと。」「3 文脈によって、新しい語の意味をくみとること。」「4 読んだことがらを、すでに知っていることがらと結びつけること。」「5 読んだことがらを組織たてること。」「6 語いを豊かにすること。」「7 さしずから従うために読むこと。」「8 速度と理解とを併行させて読むこと。」と見出しを立てて、それぞれに解説を付している。なお、「7 さしずから従うために読むこと。」は案内図や料理法、工作など、正確にさしずから読みとることが必要な場合のことをいっており、これからの生活でいっそう多くなるとしている。

「(三) 読書の衛生」では、クラスでの話し合いの中で生徒から出た意見として項目を挙げている。近視になることを防ぐための注意が柱であり、学校図書館の本においては、活字の大きさと印刷には特に気をつけている旨、記されている。

- (4) 「Ⅶ 私たちの図書館」；収録教科書：三省堂出版『中等国語一下（三訂版）』（金田一京助編修；1954年刊；教科書番号7-739；使用年度：1952～1958）

冒頭（p.1）に

私たちの図書館は

くんでもつきない知識の泉

心を育てる緑のゆりかご

たくさんの本をきちんとならべ

いつも心待ちに

わたしたちが行くのをまっている

で始まる12行の詩を掲載している。

その後、次の3つの教材によって構成されている。

- 一 私たちの図書館（pp.2-15）
- 二 ある日の研究（pp.15-23）
- 三 本の読み方 清水幾太郎（pp.23-28）

「一 私たちの図書館」では（一）から（三）に分けて中学生の視点で学校図書館の利用の仕方を解説している。

（一）では「こんな時には図書館へ」というポスターを挿絵として示しながら、音楽の鑑賞会や小さな会合にも図書館は使えることを知らせている。（二）は図書委員と利用者である中学生との会話形式で「日本十進分類法」の仕組みを説明し、書架において、どのようにして求める図書を探せばよいのか説明している。（三）では図書館内の利用者の様子を描きながら、教員に相談しての図書館利用、新聞の利用、植物図鑑や参考書（筆者注：参考図書のこと）を利

用しての調べもの、雑誌や小説の軽読書など、図書館での多様な資料利用の仕方を示している。

なお、その後に「本はどのようにしてさがすのか」を付記している。「私は図書館です。」で始まる擬人法の文体で、著者名目録、書名目録、件名目録の三種類のカード目録の使い方を説明している。

「二 ある日の研究」は、一年生のクラスの授業を図書室でのグループ学習として「安寿と厨子王」と「トロッコ」の二つの教材に登場する言葉を調べるという設定で、辞書を引く場合の注意点を説明している。まず、教員が、初めて読む作品の場合、読めない字や分からない言葉に印を付け、大体の筋をつかむようにすると、前後のつながりがわかると述べている。いきなり辞書を引くのではなく、言葉を文脈の中で把握することが大事であるとの意味である。その上で、「草がもえるころ」の“もえる”や「せめては一度でも」の“せめて”などを例にして辞書を引くことを具体的に示している。

付記されている「辞書と参考書」は、まず、辞書を使う時には、前書きや凡例をよく読んで、当該辞書の特徴やくせを十分理解しておくことの大切さを指摘している。次に、国語辞典や漢和辞典だけでは間に合わない場合、百科事典や各種専門事典を調べるように提案し、索引の利用を勧めている。他にも、「図鑑」「年鑑」「年表」「地図」などの参考書を紹介している。普通の本についても目次や索引を利用して必要な情報を拾い読みする方法を教示している。最後に理解した上でノートし、まる写しを戒めている。

「三 本の読み方」は清水幾太郎の文章である。前述の(1)で紹介したものと同じである。

- (5) 「図書館の利用」；収録教科書：愛育社『中学の国語 総合-下』（武田祐吉、斎藤清衛監修；1955年刊；教科書番号7-729；使用年度1955～1957年）

冒頭（p.38）、図書館がどのように作られているか、図書館利用はどのようにすればよいのか、公共図書館の利用、について学ぶ旨、目標が記されている。教材の構成は次の通りである。

- 一、ほん 島崎藤村 (pp.39-41)
- 二、図書館のさまざま 有山崧、北野道彦 (pp.41-44)
- 三、密林の羅針盤 有山崧、北野道彦 (pp.45-49)
- 四、宝庫をひらく三つのかぎ 有山崧、北野道彦 (pp.49-54)
- 五、どんな本を読めばいか (pp.54-55)
- 六、辞書の使い方 (pp.56-62)

「一、ほん」は島崎藤村の作品「おさなものがたり」による。“とうさん”が少年の頃、学校図書館で誰も読もうとしない本の墓地のような本棚からロバート・バーンズの詩集に会い、青々とした麦畑に鳴くひばりの声やスコットランドの若い百姓の歌声が聞こえてきたような気持ちになった時のことが語られている。

「二、図書館のさまざま」は、有山崧監修、北野道彦編『図書館の話』が出典である。学校図書館を筆頭に置き、公共図書館、専門図書館、特殊図書館、国立国会図書館、について、説明している。

「三、密林の羅針盤」も同じく『図書館の話』が出典である。日本十進分類法について解説している。

「四、宝庫をひらく三つのかぎ」も『図書館の話』が出典である。著者目録、書名目録、件名目録について解説している。

「五、どんな本を読めばいか」は、(2)の「四 読書の態度」の出典となった毎日新聞社編「本と本のやくめ」から採っている。同じ個所を使用している。前述の(2)で紹介したものと同じである。

「六、辞書の使い方」は各種辞典並びに事典を紹介し、特に漢和辞典の引き方を詳しく紹介している。

- (6)「単元1 読書技術の改善」；収録教科書：開隆堂出版『新しい中学国語 言語篇 第二学年』（平井昌夫、上甲幹一編著1953年刊；教科書番号8-815；使用期間：1954～1961）

次に掲げる5つの部分から構成されている。

- よい読み手になろう (p.2-4)
- 図書館の利用 (pp.4-16)
- 助動詞の活用と用法 (一) (pp.17-20)
- 図書のていさい (pp.20-21)
- 辞書をひこう (pp.22-30)

本文は、細かく学習活動という小見出しで始まっており、学習活動1から学習活動27までである。生徒が課題に実践的に対応するための工夫である。

一つ目の「よい読み手になろう」の中の学習活動1には読書技術改善のための学習項目が18挙がっている。ここで特徴的なのは“はやさ”を課題にしている事項が多いことである。

次の通り列举する。

- (4) 適当なはやさで黙読する。
- (5) その書物の内容や必要に応じて、読みのはやさをかえる。
- (11) 書物を読んで自分の知りたいことを手ばやくさがし出す。
- (18) 調べようとするのがらにあった辞書を手ばやくさがす。
- (19) 掲示や広告を見て、はやく正しく内容をつかむ。

他社の教材でも限られた時間の中で読書するための速さを検討するものがあったが、この教材でも速さに対応する課題が掲げられているが、加えて早く処理することを求めている。この教材の特徴点だと思う。

二つ目の「図書館の利用」では、冒頭に「図書館をたくみに利用できる人は、すぐれた読書家といえましょう。」と記している。たくみな利用とは何かが論点となる。

ここでは「図書館見学記」が掲載されている。滑川道夫の著作『図書館』から引用したものである。この文章は上野の図書館を訪問見学した生徒たちと図書館長との対話で表現されている。内容は、図書館の沿革、蔵書冊数、利用者数、図書館事務組織の構成、子どもが入館利用できない理由、貴重資料とその保管、学校図書館委員へのアドバイス、である。学校図書館委員へのアドバイス事項は、本を丁寧に扱うこと、問題を調べるためにはどのような本を見たら

よいかを先生に教えてもらうこと、複数の本を調べて比べること、書き抜いたらその書名と著者名をメモすること、であった。

学習活動5から学習活動7では日本十進分類法についての解説である。学習活動として、言葉から対応する分類を見つけ、逆に特定の分類番号からその内容を把握させるようにしている。

学習活動9から学習活動12までは主に目録について説明されている。なお学習活動11ではA5判、菊判などの本の大きさの種類を説明している。

学習活動13には図書および図書館に関して、覚えておくべき用語が列記されている。知らないことは辞書で調べるように指示している。

学習活動14は家庭や図書館での読む作法（姿勢）について挿絵を示して説明している。姿勢正しく読むことを求めている。読書衛生に関する項目である。

学習活動15は図書館での利用マナーについてである。学習活動14と共に読書衛生に関する事項も伝えている。

三つ目の「助動詞の活用と用法（一）」は文法教材である。本稿では言及することを省略する。

四つ目の「図書のていさい」の内容は、“おり張”と、本の各部分の名称について、が内容となっている。

五つ目の「辞書をひこう」では、最初に、読書力をのばすためには単語や句の数を多く知る必要があること、そのためには機会あるごとに辞書をひくことを求めている。その後、各種辞書を紹介し、百科事典、学習事典、国語辞書、漢字辞書を引く課題を具体的に与えている。

以上により、“図書館をたくみに利用”する力の獲得を図っている。

- (7) 「図書館」；収録教科書：日本書籍『国語総合編 中学1年の1』（山本有三編；1954年刊；教科書番号7-712；使用年度：1954～1961年）

3つの部分により構成されている。

- トンボ 寺田寅彦 (pp.126-135)
- 土曜と日曜 (pp.136-140)

・図書館 (pp.140-149)

「トンボ」は『寺田寅彦選 (中学生全集)』が出典となっている科学随筆である。同書末尾に付されている寺田正二による「あとがき」も掲載している。この「あとがき」で、寺田正二は「述べられている著者の考えを、そのまま、「確定された事実」とお考えにならぬように、くれぐれも気をつけていただきたいのです。…まんいち、そんなふうには誤解されると、著者の目的と、まったく反対の結果になってしまいます。」と記している。書いていることを鵜呑みにしないようにという、本を読む際の留意事項が書かれている。

「土曜と日曜」は二人の中学生の日記からの抜粋である。そのうちの一人の中学生の日記「西坂さんの日記から」に、図書館に関する記述がある。日曜日、前出の「トンボ」以外の寺田寅彦の文章を読みたいと考え、『寺田寅彦選』を借りたと記している。

「図書館」は、滑川道夫による図書館利用に関する説明文である。これは、この教科書が使用されていた時代の図書館のことが書かれており、現在の図書館事情とは異なるが、この教材を読むことにより、図書館を利用できるよう分かり易い説明である。まず、「1 受付」にて、「図書閲覧票」をもらうこと。次に、「2 目録カード」にて、自分の読みたい本の目録カードを探すように指示している。目録カードに記述されている事項、書名目録と著者名目録、件名目録と辞書体目録について、それぞれ項目を立てて詳しく説明している。また、「3 本の分類」では、書架上、本が分類順に並べられていることと、「日本十進分類法」についての説明である。「4 図書票」は、本に貼ってある請求記号ラベルのことである。当時は、請求記号ラベルという言葉がなかったであろう。この図書票というラベルにより、図書館職員が本をさがしていることを説明している。「5 閲覧室」では閲覧室利用の際の注意事項が記されている。

- (8) 「二 図書館利用」；収録教科書：大修館書店『改訂 新中学国語 二上』(能勢朝次編；1954年刊；教科書番号8-832；使用年度：1955～1961年)

冒頭 (p.30) に、図書館のような公共施設は利用法を知る必要があることを述べ、その上で、国語の力や読書の技術を図書館で実際に発揮しようと、生徒に呼びかけている。以下、次の三つの部分から構成されている。

- (一) 文字を調べに (pp.31-39)
- (二) 本を長もちさせるために (pp.40-44)
- (三) 漢字とかな (pp.44-50)

「(一) 文字を調べに」は、中学生が文字について調べる、というストーリー仕立てで図書館利用を解説している。閉架式の図書館では目録を検索し閲覧票に書名・著者名等の必要事項を記入し係の人に出納してもらった上で閲覧室にて閲覧するという、利用の流れを示している。本教材では分類目録が紹介され、この箇所では「日本十進分類法」を紹介している。また、本を閲覧する際、目次の利用を紹介している。

なお、「参考書の使い方」が付加されている。百科事典や各種の年鑑・年表・統計が参考書であり、自分が調べるのに関係ありそうな参考書であっても、内容の程度が自分に適当か、また目次を利用しておおよその内容を調べること、索引を利用すること、など実践的な注意をしている。

「(二) 本を長もちさせるために」は中島健蔵による文章である。図書館の本や他人の本のように、丁寧に本を扱う必要がある場合の注意事項を述べている。

「(三) 漢字とかな」は、知らない漢字を辞書で検索する際には、その漢字の画数と部首を知ることが大切であること、漢字には四種類の音があることを説明している。かなについて、万葉がな、ひらがな、かたかなについて簡単に説明している。

- (9) 「Ⅲ. 図書館日記」；収録教科書：教育出版『総合中学国語：総合 一の上』改訂版 (片岡良一ほか著；1955年刊；教科書番号7-759；使用年度：1956～1957年)

冒頭 (p.71) に国立国会図書館の写真を掲げ、次の二つにより、構成されている。

- 図書館日記 (pp.72-86)
- 辞書 (pp.86-98)

「図書館日記」は、生徒の日記形式で学校図書館について解説している。解説されている事項は、分類目録での本の探しかた、本の借用の仕方、請求記号、図書原簿、日本十進分類法、貸出延滞者への対応、閲覧統計表、読書衛生、図書館史、郡内中学校の図書目録の交換、の各事項である。

日記の書き手である生徒が、いろいろの場面で起こった出来事に自分を置いて執筆しているというスタイルを採っている。生徒の感情も描写され、読者は生き生きした場面を想像して読むことが可能である。例えば、図書部員である書き手の生徒が貸出延滞者の名前を図書館の掲示板に自分の判断で書き、翌日、図書部員である三年生の先輩から人権を重んじて貸出延滞者に恥をかかさないようにしたらよかった、とアドバイスされている場面がある。

郡内中学校の図書目録の交換は、総合目録あるいは相互貸借に向かって展開する話題である。教材執筆者の先進的な視点を感じる。

「辞書」は国語辞典、漢和辞典、その他の辞典、の三つに分けて、各辞典の解説が行われている。国語辞典については、見出し語の配列順序について詳細に解説されている。漢和辞典では部首索引を中心に引き方を解説している。総画索引、音訓索引の他に検字索引が紹介されている。その他の辞典では、百科事典、各種専門事典、児童用学習事典などを紹介している。個別の作家を対象とする辞典として『近松語彙』が紹介されている。

IV. まとめ

今回は、1951（昭和26）年改訂『中学校・高等学校学習指導要領国語科（試案）』に対応する「国語科」中学校教科書を見た。

紹介した教材は学習指導要領に応じた事項を含んだ教材になっている。もっとも各教材それぞれが学習指導要領に記された事項を全て含むことは出来ていない。この時期の教材で特徴的なことを列挙すると次の事項になると考える。

まず、表現形式が工夫されていること。説明文形式のものもあるが、会話形式、

ノート作成形式、日記形式、ストーリー仕立てなど表現形式は多様である。教材の中で生徒が生き生きと描写されている。教科書を読む生徒にとって、教科書の中に入っていきやすい描写になっている。

また、実践的な教材が多い。特にⅢ(6)「単元1 読書技術の改善」(開隆堂出版)での27に及ぶ学習活動は生徒にとって具体的実践的な課題となっている。また、Ⅲ(2)「六 読書」(光村図書)で読む速さを検討させ、読書ノートを作成する場合、図書館の本を利用する場合「図書館番号」を記録することを勧めるなど、細部にわたって具体的実践的な提案や指示をしている。

今回紹介した図書館教材は意欲的な教材が多かった。1948年に文部省が『学校図書館の手引』を刊行配布、1949年の伝達講習会開催、その後の全国学校図書館協議会の発足、1953年の学校図書館法⁴⁾成立、1954年の図書館法⁵⁾成立など図書館を巡る戦後の新しい制度が誕生していった時代であったため、意欲的な図書館関係教材が誕生したのであろうか。

もっとも、現実には学校図書館法誕生後半世紀近く学校図書館は学校図書館法が示しているような機関として成長することがなく、⁶⁾公共図書館について財政的措置は不十分で人々の生活圏に公共図書館がなかったことも事実である。⁷⁾意欲的な図書館教材の描く理想と現実との間にはギャップがあった。また、現代では、今回紹介した図書館教材が説明するカード目録も過去のものとなっている点など、そのままの適用が出来ないものもある。しかし、それでも、本稿で紹介した図書館教材の試みは現代において学ぶべき点が多い。分かり易い描写によって、生徒が読みながら学べるような工夫がなされているからである。

今後、今回対象とした時期の教科書(なお網羅的には紹介できていない)以外の全ての「国語科」の戦後検定教科書を調査していきたいと考えている。

注

本稿で紹介した各教科書の使用年度は公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館の教科書目録データベース記載に拠った。

引用文献

- 1) 福永義臣. 教科書の中の図書館:国定教科書の「図書館」以後. 図書館学. 1993;(62) :pp.11-23.
- 2) 平井むつみ. 学習指導要領と教科書の変遷と学校図書館:学校の教育課程の展開に寄与する学校図書館への方策を考える. 同志社大学図書館学年報. 2012; (38) :pp.65-91.
- 3) 本稿では、戦後教育改革資料研究会編集. 文部省学習指導要領 3 国語科編 (2). 東京:日本図書センター;1980.に収録されているものを参照した。
- 4) 小黑浩司編著. 図書及び図書館史. (JLA図書館情報学テキストシリーズⅡ, 12). 東京:日本図書館協会;2010:p.105.,p.122.
- 5) 同上. p.105.
- 6) 前掲2)
- 7) 宮沢厚雄. 図書館概論. 松戸:理想社;2011:p.140-141.